

スポーツ障害を有機生命論的思考で診る

～構造論から有機生命論へパラダイムシフト～

宇都宮支部 倉持怜史
鶴見 茉由



Keywords：アクティベータメソッド 心身条件反射療法 心と身体の関係性

【はじめに】

当院に来院される新患の傾向として、スポーツ障害でドクターショッピングをしたのち困り果てて来院される者が多くみられる。なぜ、そのようなことが起こっているのか。治りにくい患者は何が原因なのか。このことに以前から興味があった。この研究では改善しにくいスポーツ障害に対して有機生命論的視点で施術を施し、アクティベータメソッド、心身条件反射療法の効果に関する症例集積研究とともに前医ではどのような検査と治療を行なっているのか統計をとり比較検討をおこなった。

【方法】

1. データ収集

本研究では、2024年4月から2025年4月までの1年間に当院を受診した126名のスポーツ障害新患からデータを収集した。研究参加に協力した施術者2名（男性1名、女性1名：ともにAM認定者 PCRT認定者）がランダムに施術を行った。

2. 収集項目

カルテおよび問診票から収集した項目は以下の11項目である。

収集した項目 ①年齢 ②性別 ③スポーツ種目 ④障害部位 ⑤障害期間（日） ⑥通院期間（日） ⑦来院回数 ⑧来院頻度

⑨障害の程度（NRS）⑩初回受診からの改善度（CGI-I）⑪施術者の所見

※⑨障害の程度については Numerical Rating Scale（以下 NRS）によって施術者が評価したものをを用いた。

※⑩初回受診時からの改善度については、臨床全般改善度（Clinical Global Impression of Impression Important scale 以下 CGI-I）によって施術者が評価したものをを用いた。

CGI-Iは、初回施術日と比較した際の症状の改善度を次の7段階（1.非常に良くなった 2.良くなった 3.少し良くなった 4.変わらなかった 5.少し悪くなった 6.悪くなった 7.非常に悪くなった）で評価するものである。

3. セカンドオピニオンで来院した

（75名）が前医で行なった検査と治療内容

【当院の検査と施術内容】

アクティベータメソッドと心身条件反射療法をおこなった。

アクティベータメソッド（Activator Method Chiropractic Technique；以下 AM）というカイロプラクティックテクニック。

アクティベータメソッドは、1967年にアメリカのカイロプラクター Dr. Arlan W. Fuhr と Dr. Warren C. Lee によって共同開発

された。アメリカ合衆国ではカイロプラクティックドクターの約 70%が使用しているとの報告もあり、カイロプラクティックテクニックの中でも一番優しい施術である。神経機能を活性化し筋骨格系疾患の機能改善に有効と評価が高い論文が多く発表されている。

AM は、様々な刺激に対して下肢長を評価し神経信号の誤作動を特定し調整することが特徴である。

今までに 2,577 件の研究が審査され 201 件の研究がすべての基準を満たしていて高い評価を受けており、現在も様々な研究が進められている。

心身条件反射療法は保井 (2014) によって考案された (Psychosomatic Conditioned Reflex Therapy ; 以下 PCRT) という民間療法である。

PCRT の特徴は質問刺激と筋反射を用いた生体反応の検査により (生体反応検査法: 以下、PRT) 通常の問診や画像診断では捉えられない “無意識の反応” を可視化し、誤作動信号を特定・調整する。

PCRT は宇都宮大学、筑波大学との共同研究で 2024 年 3 月に「イップス症状における心身条件反射療法の効果に関する症例集積研究」というテーマで刊行され、スポーツイップス症状に対する有効性が確認され現在も注目を集めている。

アクティベータメソッド、PCRT とともに人を生体エネルギー、神経信号として捉え有機生命論的思考で診ることを大切にしている。

施術中の動画

AM、PCRT 施術動画（一部分を抜粋）



【結果】

1. 新患の割合を表 1、スポーツ障害部位を表 1-1 に示した

2024 年 4 月から 2025 年 4 月の 1 年間にスポーツ障害の新患が 126 名来院された。そのうち 75 名（約 70%）の患者がドクターショッピングし当院に来院した。スポーツ障害部位は足関節、膝関節で約 50%と下肢のスポーツ障害が多かった。

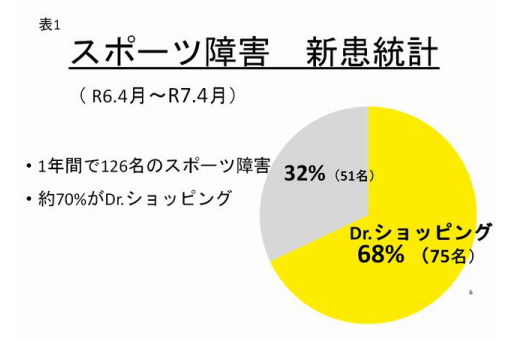


表1-1

スポーツ障害部位			
足関節	29	下腿部	7
膝関節	27	手指・足趾	7
腰部	25	大腿部	4
肩関節	13	肘関節	4
股関節	10		
			合計 126

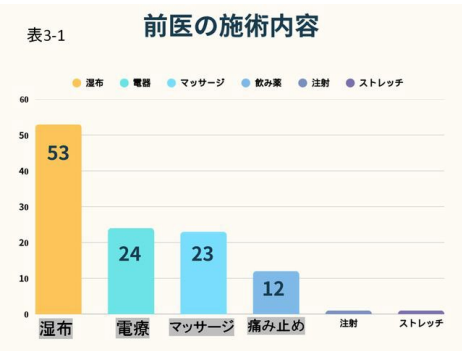
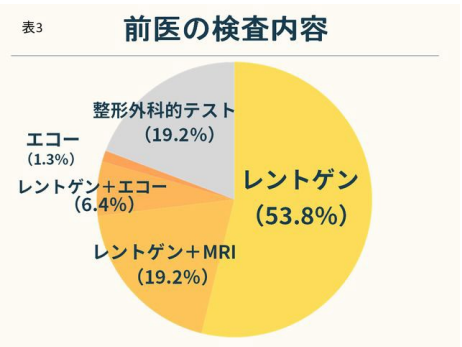
以下、表 1 の患者 75 名（セカンドオピニオンで来院）の統計データを示す。

2. スポーツ種目を表 2 に示した
サッカー・野球・陸上・バスケットボール・テニス・バドミントンと多岐にわたる。

表2	スポーツ種目			
サッカー	26	ゴルフ	2	
野球	15	極真空手	1	
陸上	12	バレーボール	1	
バスケットボール	7	ハンドボール	1	
テニス	5	ラグビー	1	
バドミントン	4			
		合計	75	

表 2 患者の詳細（前医の検査と治療内容）を表 3、表 3-1 に示した。

検査内容はレントゲン・MRI 検査で 70%以上。治療内容は湿布・痛み止め・電療（ハイボルト・超音波・極超短波・体外衝撃波など）マッサージで 90%以上であった。



3. 改善群（3回施術までに CGI-2:良くなった）とその他群の基本情報の平均値を表 4 に示した。

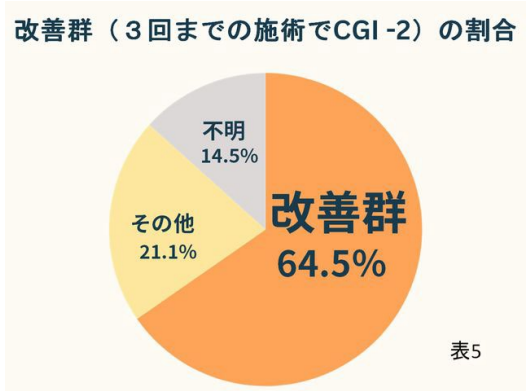
改善群、その他群において初回障害程度、障害期間の優位差はみられなかった。

表4
改善群とその他の対象者の基本情報
(3回目までの施術でCGI-2)

	改善群	その他
年齢	16歳	22歳
障害期間	33日	38日
通院期間	33日	86日
来院回数	4回	9回
初回障害の程度	NRS 4	NRS 4

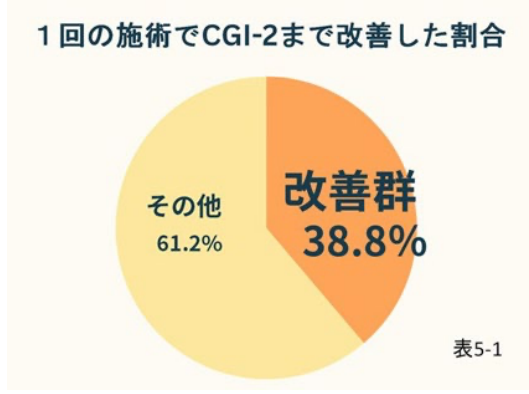
4. 3回目施術までに CGI-2 まで改善した群の割合を表 5 に示した。

3 回目までの施術で約 65%が CGI-2:良くなったと改善した。不明（14.5%）は 1.2 回で来院されなくなりデータがとれない患者である。



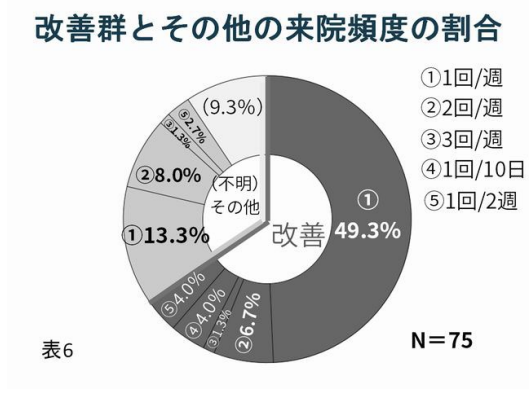
5. 1 回目施術で CGI-2 まで改善した群の割合を表 5-1 に示した。

初回施術で約 40%が CGI-2:良くなったと改善された。



6. 改善群（3回施術までに CGI-2:良くなった）とその他群の来院頻度の割合を表6に示した

改善群とその他群では来院頻度の優位差はほとんどみられなかった。



7. 改善群（3回施術までに CGI-2:良くなった）とその他群の対象者の特徴

改善群は施術に対する取り組み方が主体的との答えが多くあげられた。具体的には、施術者の話を良く聞く、施術者のアドバイスを実践するがあげられた。

また、改善を促す要因としては、施術者と対象者の間での信頼関係の構築、施術に対する理解が得られていることに関する記載が多かった。

その他群ではスポーツ復帰に対する意欲が少ない、スポーツを続けたくない、いつまでに改善したいなどの目標が曖昧との記載が多かった。改善しにくい患者は心理社会的要因が関与している、良くなった所よりもまだ痛い所へ注意が向くとの記載もあげられた。

【考察】

本研究の結果から、従来の構造論的アプローチでは十分に改善しなかった症状が、有機生命論的思考による PCRT、AM 介入によって改善される可能性が示された。特に、検査で生体反応検査法を用いたことが有効であった点は注目に値する。一方で、症例数が限定的、施術者が限られていたため、さらなる検証が求められる。

【まとめ】

本研究では、スポーツ障害患者に対するアプローチを有機生命論的視点でおこない、アクティベータメソッド、PCRT の有効性を検討した。従来の構造論的アプローチだけではなく、神経信号、生体エネルギー、心理への介入が症状改善に寄与する可能性が示された。今後、その他群(改善が滞った患者)について研究することに大きな価値があると感じている。

【結語】

今後、研究者と協力し、より多くの症例を通じて、アクティベータメソッド、PCRT の効果を客観的に評価し、スポーツ障害に対する包括的アプローチとしての確立を目指すことが期待される。

従来の画像検査のみならず患者の身体の

反応を評価する生体反応検査法を用いた検査と調整が広がり、有機生命論的思考が社会のスタンダードとなることで、患者、社会により貢献できる一歩となり私たち柔道整復師のより明るい未来が開かれることを期待している。

参考文献

- ・アクティベータメソッド第2版 原著
AW.Fuhr 監訳 保井志之 DC
- ・Activator Methods Internashonal (AMI
社) reserch
- ・心身条件反射療法 (PCRT) 基礎1. 基礎2.
中級1. 中級2. 上級. 著者 保井志之
- ・「イップスを超えて」無意識の誤学習からの
再学習プログラムへ 著者 保井志之
(2025)
- ・体の不調は脳が作り、脳が治す 著者
保井志之 (2014)
- ・腰痛ガイドブック 著者 長谷川淳史
- ・松浦佑希・坂入洋右・倉持怜史・保井志之.
(2024). イップス症状における心身条件
反射療法の効果に関する症例集積研究
- ・腰痛をめぐる常識の嘘 著者 菊地臣一.
(2005)
- ・身心の自己調整 著者 坂入洋右. (2022)
- ・バイブレーション・メディスン
著者 リチャード・ガーバー 監訳 上
野圭一
- ・コーチングのすべて 著者 ジョセフ・
オコナー 訳者 杉井要一郎